青少年育成センターだより

第３８号　平成３０年３月

ひび割れ壺の話

インドのある水汲み人足は二つの壺を持っていました。

天秤棒の端にそれぞれの壺をさげ、首の後ろで天秤棒を左右にかけて、彼は水を運びます。

その壺のひとつにはひびが入っています。もうひとつの完璧な壺が、小川からご主人様の家まで一滴の水もこぼさないのに、ひび割れ壺は人足が水をいっぱい入れてくれても、ご主人様の家に着くころには半分になっているのです。

完璧な壺は、いつも自分を誇りに思っていました。なぜなら、彼がつくられたその本来の目的をいつも達成することができたから。

ひび割れ壺はいつも自分を恥じていました。なぜなら、彼がつくられたその本来の目的を、彼は半分しか達成することができなかったから。

二年が過ぎ、すっかり惨めになっていたひび割れ壺は、ある日、川のほとりで水汲み人足に話しかけました。

「私は自分が恥ずかしい。そして、あなたにすまないと思っている」

「なぜそんなふうに思うの？」

水汲み人足はたずねました。

「何を恥じているの？」

「この二年間、私はこのひびのせいで、あなたのご主人様の家まで水を半分しか運べなかった。水が漏れてしまうから、あなたがどんなに努力しても、その努力がむくわれることがない。私はそれがつらいんだ」

壺は言いました。

水汲み人足は、ひび割れ壷を気の毒に思い、そして言いました。

「これからご主人様の家に帰る途中、道端に咲いているきれいな花を見てごらん」

天秤棒にぶらさげられて丘を登っていくとき、ひび割れ壺はお日様に照らされて美しく咲き誇る道端の花に気づきました。

花は本当に美しく、壺はちょっと元気になった気がしましたが、ご主人様の家に着くころには、また水をこぼしてしまった自分を恥じて、水汲み人足に謝りました。

すると彼は言ったのです。「道端の花に気づいたかい？花が君の側にしか咲いていないことに気づいたかい？僕は君からこぼれ落ちる水に気づいて、君が通る側に花の種をまいたんだ。そして君は毎日、僕たちが小川から帰る途中水をまいてくれた。この２年間、僕はご主人様の食卓に花を欠かしたことがない。君があるがままの君じゃなかったら、ご主人様はこの美しさで家を飾ることはできなかったんだよ」

いかがでしょうか。この話は、私たちに「子どもをありのままに受け入れること」が大切であることを教えてくれます。

私たち大人は、子どもに対して大きな期待をします。これは親として当然な思いでしょう。しかし、このことが子どもにとっての大きな負担となり、不安や困惑を感じさせる結果となっていることが多いのです。子どもに対して、「そのままでいいよ」と丸ごと認めてやることが子どもへの最高の愛情表現になるのではないでしょうか。ひびを責めずに種をまくことが大切なのです。そうすれば、子どもは自分の生まれ持ったものを豊かに開花させることができるのだと思います。

問合せ先：防府市教育委員会生涯学習課　青少年育成センター（２３－３０１３）